『東方』二九九号より

激動の隋唐帝国
――東アジア文化圏の形成

神鷹 徳治（明治大学）

本書は、講談社から刊行中の『中国の歴史』全十二巻の内、その第六巻目にあたる、隋唐時代についての最新の概説書である（二〇〇五年六月刊）。同じ出版社から、一九七四年九月に、〈中国の歴史〉シリーズ、第四巻として、『隋唐帝国』（布目潮渢・栗原益男共著）が出版されている。この二書を手にして、繙いてみると、同じ隋・唐の両王朝を対象とする概説書ではあるが、予期以上の視点の変化・深化が読みとれるようである。限られた紙面ではあるが、比較することによって、重要な視座が浮き出てくるので、今煩をいとわず、その目次を記してみることにする。

『隋唐帝国』（中国の歴史・4）

一、隋の南北統一
二、唐王朝の創業と貞観の治
三、則天武后
四、玄宗の開元・天宝時代
五、律令制
六、大唐の文化
七、律令制支配の破綻
八、両税法の成立
九、中央と藩鎮
十、世界帝国的性格の後退
十一、黄巣の大乱

トップページにもどる

氣賀澤保規著
『中国の歴史 06 絢爛たる世界帝国 隋唐時代』
四六判・四一六頁・講談社・二、七三〇円

『絢爛たる世界帝国』（中国の歴史・6）

一、新たな統一国家
二、唐の再統一とその政治
三、安史の乱後の唐代後半の時代様相
四、律令制下の人々の暮らし
五、則天武后と唐の女たち
六、都市の発展とシルクロード
七、隋唐国家の軍事と兵制
八、円仁の入唐求法の旅
九、東アジアの国々の動向
十、隋唐文化の諸相
終章　唐宋の変革の理解にむけて

両書ともに、すべて十一章になっている。歴史書の魅力は、個々の事物に対する深い理解の記述と、全体に流れる史観がどのように構成されているかにあるといわれる。魏

晋―隋唐を連結する唐代の柔構造としての貴族制の意義を評価し、そしてこの貴族制を支点として、中国を中心とする東アジア世界の形成を氣賀澤氏は論じていく。また、唐王朝の膨大な軍事力の背景となる〈府兵制〉については、第七章―「隋唐国家の軍事と兵制」において、氏の新研究の成果（注一）が縦横に駆使展開されている。

以上の如く、本書より、評者は多くのことを学ぶわけであるが、どの項目についても、同じく唐代であるものの、専攻領域（評者は、中国古典文献学）が異なることもあり、必ずしも十分な理解を持つものではない。それで、いま、少しく私の関心を惹き付ける、一、二の点について、私見を述べてみることにする。

一、円仁『入唐求法巡礼行記』

最澄の高弟、円仁（七九四―八六四）は、短期間で帰国する請益僧として、承和五年（八三八）渡唐したが、結局帰国したのは、九年後の承和一四年（八四七）九月であった。円仁の旅行記については、故ライシャワー博士の『円仁唐代中国への旅――「入唐求法巡礼行記」の研究』（田村完誓訳、講談社学術文庫、一九九九）が我々に知られていた。

玄奘の『大唐西域記』やマルコ・ポーロの『東方見聞録』にも勝るとも劣らないとされる大旅行記が新たな装いのもと、本書の味読を通じて、改めて私の目前に現われたのである。『巡礼行記』の記述は、中国側の資料には見い出せない、第一級の同時代資料として、唐後半期の世相を知らしめるのみならず、円仁一行が、途中出会った人々との交流による人間的感動をも私たちに伝えてくれる。第八章――「円仁の入唐求法の旅」がそれである。その他に本節には、近時発見されたところの、長安で客死した遣唐使留学生

トップページにもどる

「井真成墓誌」の意義、〝三武一宗〟と総称される武宗による、会昌大廃仏の凄まじい実態が語られている。ところで、この章の主要資料である『巡礼行記』には、様々な研究成果が現在報告され、巻末にも参考文献が附せられている。しかし、未収ではあるものの、この機会を借りて、是非とも紹介したい論攷がある。藤原克己氏の「円仁の『入唐求法巡礼行記』」がそれである。本論攷については、収録されている単行本を私は嘗て紹介している（注二）。

しかし、その時は、円仁の長安における求法の行動に圧倒されて、全体を把握する視点を持っていなかった。そして、そのまま、目前の大作を素通りしてしまったのである。この度、この第八章を味読することにより、改めて、藤原氏の卓論に開眼させられたというのが率直な思いである。漢文日記の『巡礼行記』が、いかにして仮名文字の〝王朝日記文学〟に連なるかの日本文学史における大きな課題がそこには細緻に、大胆に語られているからである。

二、『白氏文集』の印刷について

中唐期の文人官僚、白居易（字は楽天、七七二―八四六）の詩文集、『白氏文集（はくしぶんしゅう）』（注三）は、生前より、中国はもとより、日本でも広く愛好された。その『白氏文集』が〈八〇〇年前後にすでに、版本に彫られていたと云われる〉との記述がある。しかし、私見を述べるならば、これには検討の余地がある。唐代中期に『白氏文集』が刊本化されていたと云われるのは、中国印刷史の権威、張秀民氏の説である。張氏の説は、中国や日本においても中国印刷史の定説になっている。しかし全く反論がないわけではない。唐代には、確かにその前期、高宗の頃、仏典は既に印刷化されている。ところが、武漢大学の曹之等が

反論を加えているように、『白氏文集』の如き〈経・史・子・集〉等の本格的外典類は、依前として、未だ写本で流布していた可能性が強いのである(注四)。同章の三三六頁、上部の書影、即ち、古鈔本『白氏文集』(注五)(平安朝後期の古訓点が書き入れられている古写本で、神田喜一郎博士旧蔵、現、京都国立博物館所蔵本)は、遣唐使が将来した、唐鈔本を底本とした日本での転写本とみなされている。加之、テキストの問題は写本という形式に止まるのではない。以下、少しく、その間の事情を述べてみよう。

従来、唐代詩文のテキストとしては、中国に於ける最初の刊本テキスト、即ち宋版本が高く評価されていた。しかし、日本現存の旧鈔本資料についての長年に亘る研究の結果、次の様々なことがらが解明されたのである。即ち、同一書名のテキストであっても、その本文を吟味するならば、写本(即ち、旧鈔本)と刊本(即ち、宋版本)との間には、断絶ともいうべき本文の改変がみられるのである。換言すれば、旧鈔本には誤写等の若干の不備が存するものの、唐代の原本の形式と本文とを今にして留めているといわれている(注六)。中国では、宋版の成立とともに、厖大な唐鈔本は、例外的に残存している敦煌写本群を除いて、他の大半は急速に消滅してしまった。その消滅した唐鈔本を補足するものが、わが国の旧鈔本資料であると云っても過言ではない(注七)。ここに、日中の比較文献学の大きな課題が伏在しているのではなかろうか。

量産的印刷術が已に成立していたにもかかわらず唐代は手間暇のかかる写本が依前として図書の大半を占めていた。ここにも唐代の貴族的風潮の一端が見られるようである。

鋭い視点と深い史観が盛られている本書を読み了えてみ

トップページにもどる

ると、一見、盤石に見える三百年続いた唐王朝も、実は激動に満ちた王朝であったのではないかとも思えるのである。氣賀澤氏は、その最終章において、柔構造としての唐代の貴族制を核として、〝唐宋変革論〟を展開されている。

これについて、評者には、何ほどかも語る資格はないのであるが、敢えて云えば、本シリーズ、巻七の、小島毅氏の宋代を主な対象とする『中国思想と宗教の奔流』が、切り込みの深い応答になっているかと私には思われる。本書の第六巻とともに、第七巻をも併読されんことをお勧めしたい。

【注】

(一)『府兵制の研究』(氣賀澤保規博士著、同朋舎、一九九九)

(二)拙稿「《書評》藤原克己著『菅原道真と平安朝漢文学』」(『文学』隔月刊二巻六号、二〇〇一・一一)

(三)『白氏文集』の〈文集〉は、従来〈もんじゅう〉と読まれている。しかし、本来の読みは〈ぶんしゅう〉であることを指摘している。拙稿「『文集』は〈もんじゅう〉か〈ぶんしゅう〉か」上・下(『高校通信東書国語』二八九(上)・二九〇(下)一九八九―九〇)

(四)拙稿「国書所載の漢籍の本文について――『文集百首』を中心として」(『中国読書人の政治と文学』所収、創文社、二〇〇二)の注(三)を参照されたし。

(五)『神田本白氏文集の研究』(太田次男博士・小林芳規博士共著、勉誠社、一九八二)は、旧鈔本「新楽府」の原本復元の校本である。

(六)拙稿「『源氏物語』の注釈『奥入』所引「長恨歌」の本文の系統について」(『桐壺帝・桐壺更衣』〈人物で読む『源氏物語』〉所収、勉誠出版、二〇〇五・十一)

（七）『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』三冊（太田次男博士著、勉誠社、一九九七・二）

トップページにもどる